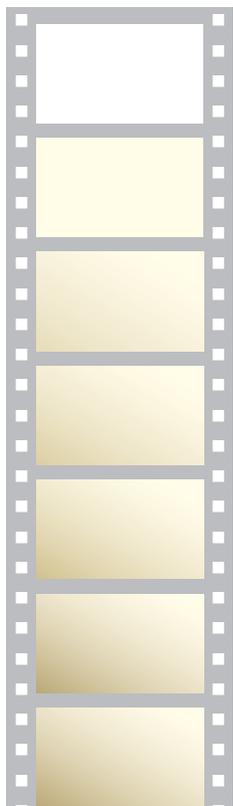


伸^{ノブ}さんのシネマトーク

鈴木 伸夫



第七十一回 「青森駅プラットホーム」

函館生まれのぼくが青函連絡船に初めて乗船したのは、小学一年生になる6才の頃、父が愛知県の豊橋市へ転勤した時でした。6才の小学生から21才の大学4年生になるまで、友達と旅もしなかった（団体ではしました）のもおかしな話です。

6才の頃、函館駅から連絡船の乗船名簿（自分の住所や氏名・年齢などの個人情報を書いて船に乗る時必要な書類のこと）を駅員に提出した覚えがあります。それから船旅3時間50分、船から降りると、まだこの時代この世には存在しないあの曲が、聞こえてくるようでした。

♪ 「津軽海峡・冬景色」

作曲・編曲 三木たかし

作詩 阿久 悠

歌 石川さゆり



シングルレコードのジャケット

「津軽海峡・冬景色」

発売元：日本コロムビア株式会社

上野発の夜行列車 おりた時から

青森駅は雪の中

北へ帰る人の群れは 誰も無口で

海鳴りだけをきいている

私もひとり連絡船に乗り

ここえそな鷗見つめ泣いていました

ああ津軽海峡・冬景色

♪
(中略)

石川さゆりが歌うこの曲「津軽海峡・冬景色」は、ご当地ソングの一曲として77年（昭和52年）1月1日に発売され大ヒットしました。

そして、第19回日本レコード大賞歌唱賞を受賞しました。聞く話によると、この曲は題名とメロディーが先に出来上がり、そのあと作詩をしました。ぼくにひとつ言わせていただければ、まぶたを閉じてこの歌を聞いていると、この歌はドキュメ

ントタッチの映像が自分の頭のなかに浮かんでくる珍しい曲だと思います。好きな曲です。

余計なことですが、NTVの「ズームイン!!朝!」担当キャスターだった、徳光和夫アナが（まだフリーになる前、サラリーマンアナの時）出張で青森へ来た時、数人のスタッフとともに夜、連絡船が出入港するのを間近に見られるスナックへ案内しました。生ナマで動く連絡船を目の当たりにしながらマイクを握り歌ったこのカラオケは、徳さんにとつてもぼくにとつても忘れられない思い出の曲となりました。ところで、読者は東海。道新幹線が開業する64年（昭和39年）までは、青森駅のプラットホームが、「日本一」長かったのをご存じでしたか？

現在イマは、運航していない青函連絡船への乗り継ぎのため、港の先までプラットホームが必要だったからです。駅の長さは約360メートルおよそありました。

この長いホームで映画のロケも行われました。65年（昭和39年）製作され4月18日から「関東流れ者」と二本立て封切られた「網走番外地」の2作目「続・網走番外地」（65年製作・監督 石井輝男・出演 高倉 健ほか。音楽 八木正生）の前

半に当時の青森駅のロケシーンが出て来ます。(公開は65年の7月10日から。同時上映は「関東やくざ者」)

このほか、「男はつらいよ」のシリーズ15作目「男はつらいよ 寅次郎相合い傘」(75年製作・監督 山田洋次・出演 渥美 清・浅丘ルリ子ほか。音楽 山本直純)では、連絡船の上で寅さんと歌手のリリーが初めて出会います。

そして水上 勉の原作小説を映画化した「飢餓海峡」(65年製作・監督 内田吐夢・脚本 鈴木尚之・出演 三國連太郎・伴淳三郎・左 幸子ほか。音楽 富田勲)。

台風が青函連絡船を襲い多くの死亡者が出ます。しかし収容した遺体は、乗船名簿よりも二人多かったです。逃げる犯人、追う定年刑事と若い刑事。一目会って礼を言いたい下北の女、ラストシーンの舞台は連絡船上でした。

(この作品はドキュメンタリー風の粗い画面にするため16ミリフィルムで撮影され、そのフィルムを35ミリにブローアップ(拡大)して劇場で上映されました。

(東映W106方式) また、上映時間も封切り前に対立がありました。ここでは

省略します。

降雪し雪が降りつもる青森駅プラットホームの人の群れを見てぼくは、「いよいよラストチャンスか!」と冷たい空気を吸って気持ちを整え、青森駅出口を目指しプラットホームを歩き出しました。

(続)

文中敬称略

【追記】

映画「飢餓海峡」で主役を演じた「三國連太郎さん」が平成25年4月14日、急性呼吸不全のため亡くなりました。享年90才でした。

若い読者には「釣りバカ日誌シリーズ」に出て来る鈴木建設の社長「鈴木一之助」、通称「スーさん」でおなじみでした。

性格俳優だったあの三國連太郎がなぜ喜劇に挑戦したのかその心理はわかりませんが、ハマちゃん（西田敏行）とのコンビは絶妙でした。

人を泣かせるよりも笑わせるほうがむずかしいのかも知れません。

彼の芸名「三國連太郎」は、木下恵介監督の映画「善魔」の役名から取ったもので、三國連太郎のデビュー作です。

また、映画監督としても活躍し、監督三度目に挑んだ映画「親鸞・白い道」で第40回カンヌ国際映画祭審査員賞を獲得しました。

ぼくはその映画の公開キャンペーンで三國さんが青森へ来た時、インタビューしましたが、いまから思えば「スーさん」に近い人柄でした。お別れの時、車のドアまでお見送りをする、スーさんはぼくの耳元でこう言ったのです。

スーさん 「あのね、鈴木さん。ぼくは何度も結婚しているんだけど、そのうちの一人が確か青森の出身で、風の便りに聞くと、『現在は自動車会社の社長夫人に収まっている。』と聞いたんだけどご存じない？」

お別れにインタビューするほうがこんな質問をされるとは思わなかったもので、ぼくは言葉に詰まりました。そして、

伸 「すみません、三國さん、存じ上げません」

と正直に答えました。

また、青森県を舞台にした映画「八甲田山」のロケ取材のため、フィルムも、ベルハウエルの16ミリカメラも凍るロケ現場へ取材に出かけた担当ディレクターの話によりますと、この映画に出演していた三國さんは、取材の撮影をスムーズにするため、現場のことをよく知っている人でなければ務まらない「ケーブルさばき」や「バッテリーライト持ち」などを「積極的に手伝ってくれた」と語っていました。そんなやさしさも合わせ持つ三國さんのご冥福をお祈りします。

合掌

伸

平成25年11月